

「雲が発生する一瞬」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

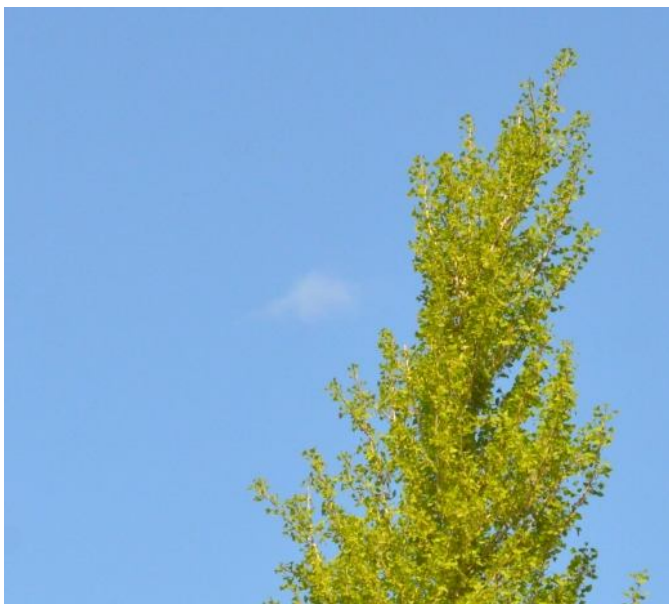
田中 千尋 Chihiro Tanaka

今年度は、3年担任と同時に、5年生の理科を3クラス担当している。なかなかハードな週時間割である。3年の理科も5年の理科も、今まで何度も担当し、一応は指導内容を心得ているつもりだ。しかし何度担当しても、子どもたちとの活動を通して新しい発見があるものである。この日もそうだった。



この日は九州南部に低気圧があったが、東京はまだ快晴に近い空模様だった。低気圧が近づいてくると、通常は巻雲や巻積雲などの「上層雲」から現れることが多い。屋上から見える雲は少なかったが、そ

れでも、鈎状巻雲や巻積雲などの、上層雲が現れ始め、天気の下り坂を予見していた。



ある子どもが「イチョウの左側に、今、雲ができた！」と叫んでいる。確かに、イチョウの樹冠あたりに、小

さな雲塊が、まさに「今」発生していた。



写真は30秒後の姿で、明らかに大きく、濃くなっている。しかし周囲には、ほかに比較する雲がなく、巻積雲のような「上層雲」なのか、積雲のような「中層雲」なのか、判別できなかった。雲種と高さを判定するには、成長する様子を続けて観察するしかない。



約10分後、雲は南東に流されながら成長し、幾筋かの薄い雲になった。私は「波状巻積雲」と判定して、子どもたちに伝えた。巻積雲は上層雲の一種で、高度8,000mから10,000m付近に発生する、全て氷晶の雲だ。非常に希薄な雲で、この雲自体が雨や雪を降らせることは絶対はない。しかし、快晴から巻積雲の発生があり、しかも波状を呈することは、対流圏上層に水蒸気を含む気流があり、その気流が波打っていることを意味する。実際にこの2日後、東京に雨が降った。